

書評 : *Japanese for College Students*

西尾 珪子

1. はじめに

Japanese for College Student の書評を書くに当たりまずお断りしなければならないのは、刊行されてから現在まで、残念ながらまだ使用する機会に恵まれていないことである。つまり書評と言ってもあくまでも読み通した上での書評であり、使用した上での書評でないことである。したがって教科書の書評としては適さないかもしれないし、資格がないかもしれない。にもかかわらずお引き受けした理由は、筆者の属する（社）国際日本語普及協会（AJALT）が、同一出版社から一般社会人学習者向け日本語教科書「Japanese for Busy People」を出版しているからであり、この教科書が国内外で広く使用されているので、今回刊行された学生向けの「Japanese for College Student」と、対比する視点で分析できると考えたのである。そのような視点での書評であることをご理解いただきたい。

2. 全体の構成

学習時間数300時間の切り方を場面として分類して均等に10課ずつに分けていること。

第1巻 90～100時間 10課 自分のことや身の回りのこと

第2巻 90～100時間 10課 他の人と接触する場面

第3巻 90～100時間 10課 社会的な場面や公的な場面

それに対してJBP（前述のJapanese for Busy People）

は下記のようにしてある。

第1巻 60時間 30課 サバイバルのための日本語力

第2巻 120時間 20課 一通りのコミュニケーションのための日本語力

第3巻 120時間 20課 より自然で効率のよいコミュニケーションのための日本語

同じ300時間でも、学生が十分な学習時間を投入して、均等の授業時間で学習していくための教科書と、社会人が少い学習時間の中で、より早く日本人とコミュニケーションを作るための教科書との違いが、このような課立てから明確に表れている。社会人の場合はまずコアを構築して、それを同心円的に広げていく必要がある。

大学生と社会人では各課の分量についても当然違ってくる。大学生は1年間の学習時間が決まっていて、単位取得まで継続するからこれでよいのだが、社会人は短い時間帯でその都度ある程度の達成感を持たせなければならない。そのためには項目ごとに小刻みにせ

ざるを得ない。

むしろ、Japanese for College Student では、1課の分量が多く、到達度が高い割には読み物は最後までかなり簡単で、ロールプレイもそれほど複雑になっていない。扱い切れぬ部分はドリル以外のコンテキストの中で補うようにとのことだが、ここで個々の教師がどのような授業展開を行うのか教えていただきたいところである。

3. 表記について

第1課から漢字仮名まじりで読む練習は、従来、仮名から漢字へと日本の文字の3種類を段階を踏んで学習させる手法から脱皮したものとして評価したい。これならば、最初のうち平仮名や片仮名を集中して学習しても、実社会の表記とはほど遠いという学習者の不満が解消でき、その上無理に分かち書きを覚える必要もない。そして、日本語の平仮名、片仮名、漢字の役割が早く飲み込める利点がある。

ただし実際には“Getting Started”で平仮名と片仮名の習得をテープを聞きながら行うようになっているが、書き方の指導に教室作業としてどのように関わるのか、教師の指導が無いとすれば筆の方向付けの→↓などの指示が必要かもしれない。仮名の書き方を自習させた場合、文字でなく図形になる弊害を見ることがしばしばあるからである。拗音・促音の位置なども同等である。

また、ルビを振ることについて、学習目標漢字が初出する課では、まずルビを振っておいたほうがよいと思う。予習の段階で正確な読みが分からないのはもどかしくはと思うからである。

難を言えばこの教科書の漢字練習のマス目が小さく、かつわずかしかないことである。学生の手許に別紙を配るならば、思い切って文字の練習帳を別途作ることによって効果をあげることも考えられるし、そうすればこのスペースが他に活用できる。

4. 学習の内容と段階

英語圏、あるいは英語話者への日本語教科書であるから、すべて解説は英語であることは当然であるし、その英語が分かりやすい平易な文章であるのはいいことである。課ごとに文型を起点として類別しまとめて扱っている。この手法の場合、えてして文型に縛られて無理が起ころがちだが、この教科書でもそういう点が見えないわけではない。たとえば「～たら～」の初出の課で、コンテキストなしに「高かったら買いませんでした」(Vol. 2 p148) などが出てくるのは学生がとまどわないだろうか。またp150「吉祥寺だったら」というのもこの段階ではまだ難しい。JBPでは、発話者の気持ちがある場面の中でどういう形をとるか、ということに注目し、話者の気持ちを重視する姿勢を根底においているので、その視点から言うところのこのようなところは気になってしまう。どうしても本文中の会

話というものは不自然な文型羅列になりやすい。自然に近づければ学習には難しくなる。本文会話の位置づけはJBPの作成過程でも大いに議論したところである。日本人の自然な発話のパターンが示せないこと、コンテキストによって表現が変化することの処理、対人関係や場面による表現の相違が標準的にしか表せないこと、文法の基本に忠実に習った文型が慣用句のごとく使われる例が多くなること、等々JBP作成時の議論が再びよみがえって来た。

前出の「～たらどうですか」「～たらいいですよ」「～たら？」など、～たら文型としてまとめるのは上記の点で無理があるのではないだろうか。会話の中で必然的に出て来てこそ学習が効果的に出来るのだと考えるからである。

また、動詞の活用を consonant verb と vowel verb としている点、入門期にローマ字入門する人のためには合理的である。ただ、いつまでこれを続けるか問題であろう。日本語の動詞活用がローマ字なしには説明不能と言うことになりはしないだろうか。仮名が早く導入され、50音図が分かっているのであったら、なるべく日本語表記で活用を定着させるよう努力したいと思うのだが。

一般にドリルの部はコミュニケーションに重きをおいていて新鮮味があっていると思った。

5. おわりに

細部にわたってまだまだ良い点、気になる点はあるにはあるが、大学のカリキュラムに沿って書かれた教科書であるというスタンスがはっきりしていて、学生がこれを一所懸命マスターしていく姿が見えてくるような教科書である。いささか盛りたくさんで学生の負担が多過ぎはしないかと思われるが、日本語学習が本命である若い学生たちには、このくらいの分量の消化は求めて当然なのかもしれない。社会人に教えていると、社会人なりの多くの疑問に答えて授業を進めなければならない、いかに要点のみスリムにするかということに日常迫られるので、この教科書を時間をかけてこなす授業がまことに羨ましく思える。一方使用する教師の裁量、負担を少なくしようとの努力もうかがわれる。

いずれにしても、大学での日本語教育に長年携わられた方々の豊富な経験と研究の蓄積によって出来上がったこの教科書の価値は高く、著者の方々の立派な研究成果であると言うことができる。このあと、補完教材が多角的に揃い、画像と音声を含めてCD-ROMが出来ること、インターネットにも載るようになることを期待したい。

最後に同じ出版社から刊行された日本語教科書として、この Japanese for College Student と Japanese for Busy People が、それぞれの性格、目的、特徴を明確化することにより、学習目的別に的確に選択されていくことを望む次第である。

(国際日本語普及協会理事長)

書評： *Japanese for College Students*

吉岐 久子

1. はじめに

この度、母校 ICU より出版された「ICU の日本語 Basic」に関して、中等教育に携わってきた者の観点から「にほんごかんたん」（研究社）と比較しながら書評を書くようにとのご依頼をうけたので、簡単にいくつかの類似点、相違点を挙げながら、その線に添って「ICU の日本語 Basic」の御紹介をさせていただこうと思う。「ICU の日本語 Basic」は、初めて日本語を学ぶ大学生のために書かれた教科書で、聴く、話す、読む、書くの4スキルを総合的に伸ばすように考慮されていて、個々のスキルだけでなく日本語を社会的文脈のなかで総合的に使いこなしていくことまでを目指した画期的な教科書である。

「にほんごかんたん 1、2、3 巻」（研究社）は小学校高学年から中、高校生までを視野に入れて作成されたもので、国内のインターナショナルスクールや、世界各地の中等教育段階でかなり広く使われている初級段階（能力試験 3 級までの文法事項を含む）の教科書である。両親の仕事の関係で日本に住むことになり、インターナショナルスクールなどに通う中等教育段階の学習者には、自分の意志で日本語学習を選択するものは余り多くない。大抵の場合、両親や教師のガイダンスで外国語の一つとして日本語を選択をすることが多い。日本で勉学するために日本語を学ぼうという大学生の学習動機と比較すること自体無理があるかも知れないが高校と大学の日本語プログラムの連結（Articulation）の面から見て興味深い題材として分析を試みることにする。

2. 全体の構成

時間数は「ICU 日本語」の場合、約 300 時間としている。集中教育とそうではない場合とでは異なるだろうが約 1 年で初級段階が終わるようだ。一方「にほんごかんたん」は 1 巻から 3 巻まで終えるのに 3 年から 4 年かかる。一般に中等教育の日本語は能率が悪いといわれるが、学校行事などで授業が潰れたり、学生の学習意欲に波があったりすることなどにも理由がある。

「ICU の日本語 Basic」は、基本となるシラバスとして、構造シラバス、場面シラバス、機能シラバスを三本の柱と考えている。それぞれのシラバスは次々に取って替わるものでなく、むしろ補い合うものであると考えられ、従来のシラバスの理念に欠けているものを補う形で新しいシラバスの概念が出現したと考えると、この三本の柱を掲げるのは極めて妥当なことと思われる。「にほんごかんたん」でも教室外ですぐ役立つ実用的な日本語の習得をめざしながらも学生達が将来大学生になったとき、日本語の勉強が続けられる

ように、きちんとした文法を身につけることも大切だと考えているので、同じ方向を目指しているといえよう。

3. 教師の役割

ここで少し教科書の役割と教師の役割について考えてみたいと思う。われわれが中等教育向けの日本語教科書「にほんごかんたん」(研究社)の作成に当たったとき、基本的な前提概念は教科書というものはリソースの一つとして使われるべきであるということであった。段階を踏んで基本を身につけることは重要ではあるが、同時に教師が余り教科書に縛られてしまうのも感心できないのではないかと考えたのである。しかしまた一方では、教科書を忠実にフォローすれば少なくとも、日本語を学んでいく上で必要となる最低限の基本的な重要学習項目はマスターできるという安心感もあたえなければならないと考えた。

一般的に言ってベテランの教師なら教科書を一目見ただけで、どうすれば楽しく効率的に教えられるか分かるが、初めて教える人は、まず一年目は教科書のノルマをこなすことだけで精一杯である。2年目になって少し余裕が出てくると、もっと色々楽しい工夫ができるようになるだろうが、その間に失われた学習者の時間は取り戻すことはできない。そう考えると教師の責任は重大である。そんな場合でも「ICUの日本語 Basic」は、学ぶ側と教える側のニーズに柔軟に対応しているので、教師も学生とともに成長していくことができるように思える。その意味で本書はかなり User friendly な教科書であると言っても過言ではないと思う。

本書を高校生が使うとしたらどうだろうか。現在、世界中の中等教育段階で日本語を学ぶ学生が増え、教材もそれなりに充実してきているが、高校生向けに作成されたものはまだ多くはないようだ。海外の場合、日本に行ったこともなく、また将来日本に行くことなど想像もつかないような状況下で日本語を学ぶ高校生も多い。大学や高校というような場面だけの問題ではなく、地名なども重要な課題となる。日本の国内の地名、しかも ICU の近辺の地名などは余り意味をもたない。また交通手段としても移動は全て自家用車で行い、公共交通機関の使用は皆無といっても言い過ぎではないアメリカの中西部などで学ぶ高校生にとっては、彼らのおかれている状況に相応しい、より現実的な場面やトピックに基づくアクティビティーを工夫することが必要となるであろう。

AFS に代表される交換留学生は当然日本に住み、日本の高校に通うので日本語を学ぶ動機も大学生なみであると想像できる。交換留学生は日本人の家庭にホームステイするので、もう少し家庭生活に関するトピックが必要になるかも知れない。この場合大学生向けの用語も高校生向けに変える必要がある。「学校生活」をトピックとして取り上げる場合にも、部活とか文化祭などの語彙も必要になるだろう。「留学生の12ヶ月」(凡人社)¹⁾などと組み合わせて用いることを勧めたい。一方、高校生がそのまま用いるには一課の内

容が盛り沢山過ぎるので取捨選択が必要となる。

しかしどのような学習者が対象であったとしても、教師は教科書を学習者に合わせて料理していかなければならないし色々と自分で創意工夫を加味して楽しい授業ができるよう、言い換えれば学生が楽しんで学べるよう工夫する必要がある。このことはどの教科書を用いる場合でも同じであって、その点から見ると、本書には教師が膨らまして使う余地が十分に残されているように思える。

4. 表記について

表記は原則として漢字仮名混じりで書かれてはいるが、必要に応じて仮名またはローマ字でルビを付け段階的に自然な日本語の表記に到達するようになっている。ローマ字表記使用に関しては、多々議論の生じるところであるが、「にほんごかんたん」では、なるべく学生にはローマ字は見せたくないと考えた。年少者の場合ローマ字を使わないことが、いかに彼等の日本語の世界を豊かに膨らましていくかを身をもって体験しているからである。大人と年少者の違いかもしれないが。ルビが横書きの言葉の下側についていることには、学習者がルビの上に紙を当ててルビに頼らず読むという練習もできるという利点がある。

5. 課の内容

各課には Objective として到達目標が Expressing desires や Saying the appropriate courtesies at meal time などのように機能の形で明記されている。「にほんごかんたん」でも各課の題名を機能の形で提示することにより、到達目標が明確に分かるようになっている。そのため、学ぶ側も教える側も一つの課が終わった時点で、学習者が何ができるようになっているかをはっきりと認識した上で、日本語学習を始めることができる。外国語の習得過程で学習者が到達目標を認識していることは大変重要なことなので、これが明記してあることは本書の特長の一つであると言えよう。

READING の部分ではその課のトピックに基づいて種々の情報が、色々な形式の「読み物」を通して提示されているが、その「読み物」を読み、与えられた情報を理解していくプロセスのなかで、学習者は書いたり、話したりして反応することを求められる。

WRITING の部分では既習漢字の読み替えを含む語彙表現の読み方、新出漢字の導入、書く練習、読む練習などになる。内容重視は漢字の練習にかなりのページを割いている。

どの漢字をいつまでに、どのくらいということまで細かく指示し、学習者の自習を可能としている。漢字の習得は日本語学習の際、避けては通れない項目であるため「ICU の日本語 Basic」は学習者にとって極めて親切的な学習方法を提示していると言える。しかし本書を年少の学習者に使うとしたら、これだけ多くの漢字及びその応用例を学ぶことはと

でも望めない。年少者の特色の一つとして耳からの習得に優れていることが挙げられるが、耳から入ったものの定着を図るために読んだり書いたりする必要があるのもあって、その際の学習者の負担を極力少なくしなければならない。それ故「にほんごかんたん」では、漢字の導入は学習者のニーズや能力や動機等を考慮にいれて教師が判断することになっている。

GRAMMAR NOTES ではその課の重要項目を学習者が自習できるよう英語で説明されているが、これは英語圏の学習者だけを対象と考えているというより、英語を国際語として位置付けているためと思われる。必要とあればこの英語の部分を他の外国語に置き換えることも可能であろう。「にほんごかんたん」も同様の考え方に基づいてはいるが説明はずっと簡単になっている。年少者には英語でも文法用語は難しいため極力控えてある。大学生との違いであろう。また関連した文法事項をまとめて同じレッスンで出すと混乱を招くため、一つのトピックでは一つしか触れない。これも大きな違いである。

6. おわりに

高校の最後の2年間位で日本語を学びたいという高校生のための日本語教科書はまだあまり種類が多いとは言えないので、この「ICU の日本語 Basic」は、やる気のある子にはそのまま大学生になったつもりでという設定にして使うこともできるだろう。一言で言えば、本書は大人の世界へとちょっぴり背伸びしたい年頃の、少し大人っぽい高校生にも前述のような工夫次第で使えると思う。高校後半から大学にかけて使用されれば、大学のカリキュラムとの連結（Articulation）の問題もかなり解決されるかもしれない。高校で日本語を学ぶ学生が増えて来ると大学のプログラムに入ってくる学生の日本語能力がバラバラで揃わず大学のプログラムへの影響を憂慮する声もある。かといって、折角の高校での努力が大学で認められないとすると、年少の学習者の意欲をそぐことにもなりかねない。このような Articulation の問題の解決に関しても本書が役かってくれることを望みたい。

1) 『留学生の12ヵ月』村野良子・谷道まや、凡人社、1993

（国際交流基金ロンドン日本語センター主任講師）

書評 : *Japanese for Collge Staudents*

佐々木倫子

1. はじめに

本書に目を通してまず思ったのは、『Modern Japanese for University Students』シリーズの次の時代を担うにふさわしい教科書が出たという感想だった。日本語教育界に大きな足跡を残した教科書の跡を継ぐことは容易ではないが、本書はその重責に耐えている。初級日本語の正統派の教科書と言えよう。「はじめに」「この本を使う人のために」「日本語の基本的特徴」「日本語の表記」とびっしり並んだ細かい活字は、生半可な学習者には近寄りがたいかもしれない。「日本語ってこんなに簡単なんですよ」「こんなに楽しいんですよ」と手招きして、本屋でひょいと手にとって気軽に購入してもらおうことを狙うといった風潮とは無縁のものである。第一課から始まる日本語表記の多さ、課ごとに含まれる文法項目の多さも、学習者によっては乗り越えられない壁となるかもしれない。ただ、本書に合わない学習者を対象とする日本語教師にとっても、参照する本として、陰の助言者として役立つ面は大いにある。

本書のタイトルを見た時、すぐ頭に浮かんだ日本語教科書が3つある。当然、国際基督教大学語学科日本語研究室(1963) *Modern Japanese for University Students* Part I が浮かんだが、次に「college」という単語から以下を思った。

Tamako Niwa & Mayako Matsuda (1964) *Japanese for college students: Basic*, University of Washington Press (以下、Niwa & Matsudaと略)

John Young & Kimiko Nakajima (1967) *Learn Japanese: College Text* Vol.1~ 4, The University Press of Hawaii

以下、この親世代の3教科書と本書とを比較する中で本書の特徴を私なりに整理し、感想を付け加えることで書評とさせていただきたい。

2. 親世代教科書との共通点

親世代と本書との共通点として、大学生向けであること、初級日本語全般を扱っていること、英語を媒介とすることは、タイトルや本の厚さからでも十分推察できる点である。どれも著者が大学教員で、単独著者ではない点なども、共通する。そして言語構造面の扱いを見ると、どの本もしっかりとした記述言語学的立場を基盤としており、対象者の知的レベルを意識して、かなり詳細な文法説明等がなされていることに気付く。ただし、本書の文法の扱いは「フォーメーション」の部分で平易な言葉や一覧表、図示の多用により、わかりやすく導入した上での説明である。これは大学生の認知方略の変化と一致している

と言うべきだろう。文法理解は重視するが、難しい文法用語や説明で学習者を戸惑わせない姿勢に好感を持った。

どの本も基本的に真面目で、それがreadingの基調にも反映され、本書も25課で多少ユーモラスなタッチが見られる程度である。実際、教科書にユーモアを盛り込むのは難しい。大抵は教室にしらけた空気が漂う結果になりがちで、ユーモアで失敗するよりは、無縁な姿勢をとるほうがすっきりしていると思う。

非漢字系学習者を対象とするという基本線を持った上で、聴く・話す・読む・書くの4技能をバランスよく発達させるにはそれなりの取り組みがある。どの本にも共通する、口頭練習にあてる部分の量の多さやアクセント記号の明記は、話しことばの重視をうかがわせる。親世代の教科書は特に口頭練習の設定において、その真価を発揮した。活気ある自然な調子の代入練習や変形練習、応答練習、拡大練習がリズムカルに行われることを願って、各課ごとにいくつもの材料が盛り込まれた。言語学習は、対象言語の表現が自動的に口をついて出るまで体に覚え込ませてしまう側面を持つ。その面に関して、親世代は力を注いだ。といって大学生向けであるから、読み書き能力の育成に配慮している点も共通すると言ってよい。([Niwa & Matsuda]には読み書きが含まれていないが、早くからの導入は奨励されている。)なかでも、国内学習者を第一の対象とするICUの教科書が、親世代・子世代ともに、より早い速度で表記教育を進める。このように、親世代と本書で共通する点は多いが、一方、相違点もかなり見られた。

3. 親世代教科書との相違点

(1) 教師完全主導型から教師部分主導型へ

本書は、学習者自身の予習及び復習を当然の前提とし、学習者の主体的勉強の必要性が繰り返し述べられている。しかし、ここで求められる予習および復習は、教室内でしばしば行われる構造化された学習活動を教室外にも広げる動きで、親世代でも活用された伝統的なものである。本書が親世代と違う点は、各課のobjectivesやpointsに見られるような、学習者の自覚を常に高めようとする姿勢にある。各活動、フォーメーションのひとつひとつにまで小見出しをつけ、なんのために練習をするのか、することによって何が出来るようになるのかについての学習者の認識を促し、主体的な活動に結びつくことを意図している点である。

また、教室配置にしても、教師と対面する形で学習者が座する形や、教師を中心として丸く囲む形では、ロールプレイやインタビューはしにくい。本書を生かそうとすれば、物理的配置も教師完全主導型から脱却しなければならない。ドリルやロールプレイの内容を見ても、学習者の選択や創造にまかされている点が散見される。モデルを出来るだけ正確に模倣することを要求する親世代とは異なるわけで、これもまた教師完全主導からの脱却

にあたる。本書の、自覚・自立の姿勢を持った学習者を育成する姿勢を歓迎したい。

(2) 構造シラバスから複合シラバスへ

親世代のモデル会話や読解教材が、場面や機能を無視していたわけではない。しかし、本書とはシラバスにおける構造面の占める重みが異なることを感じる。本書では、構造、場面、機能が慎重に組み合わせられている。学習者は、ある課においてどんな文型・文法を学ぶのかよりも先に、日本語を使って何が伝えられるようになるのか、何が出来るようになるのかを知るような構成になっている。学習者の中で文法学者になる者はごく限られており、圧倒的多数がコミュニケーションの手段としての日本語習得を目指していることを思えば、当然の選択である。

そして教室活動もまた、文単位の練習であるフォーメーションから、インターアクションの形であるドリル、そしてロールプレイへと進み、ごくスムーズに現実の場面でのコミュニケーションへとつながるように組み立てられている。親世代にも応答練習があり、会話練習があった。しかし、既に触れたように、親世代の「応答ドリル」と本書の「ドリル」との違いは、場面が明示されていること、回答する側に回答の選択の余地が与えられていること、現実場面を感じさせる視覚補助が多用されることにある。それは、モデル会話の暗記中心であった親世代と、本書のロールプレイとの差につながっていく。本書は言語能力育成とコミュニケーション能力育成の両観点から見た時に、バランスがしっかりととれていることを感じさせる。

(3) 教師用指導書

本書のTeacher's Manualに関して、英語で書かれた部分が多いという点にユニークさを感じた。これは、日本人教師に学習者と同じような感覚を味わわせるという副次的な効果を持つ。学習者が教科書をあけて日本語表記の多さに戸惑う感覚の裏返しである。また、日本人教師が英語圏の教育機関に行き、英語を媒介にする日本語教育が要求された時に、非常な味方となることも確かである。しかし、一番のメリットは、英語を母語とする日本語教師にとって使いやすいという点だろう。現地教師による日本語教育が広まりつつある今、こういったmanualの出版を歓迎したい。

4. 今後に向けて

様々な利点を備えた本書であるが、今後さらに以下の点を考慮していただけたらと思う。

(1) 教室外言語生活を取り込む教科書へ

学習者の自立を促すという観点から、もう少し教室外での言語習得を積極的に取り込む編成に出来るのではないだろうか。学習者の言語生活を総体的に捉え、教室内だけでなく教室外でどのような言語獲得が行われるか、それを推進する活動はどのようなものを計算し組み込む余地があると思う。日本人大学生や、日本人家族にインタビューをしてくる、

マスメディアを利用して調査するなどの活動で、本のスペースをあまりとらない方法もあるのではないだろうか。

(2)内容重視の教科書へ

教科書の主役は誰かを考えた時、例文の中のスミスさんやリーさん、田中さんだけがいつまでも主役という形ではないことを歓迎したい。ドリルやロールプレイの主役は学習者自身である。しかし、世の中には日本語はちょっと背伸びしてでも取りあげたい話題が多くあり、「私はどうした」「私は何が好き」や「ぼくの友達はどう」といったことに終始するのはやや幼い感じもする。インターアクションを重視するからといって話題を日常生活のやりとりに限ることはないわけで、28課のreadingのような記述文が少ないことは、学生対象であることを考えるとさびしい。もう少し抽象的な話題も盛り込んでほしいと思うが、欲張りすぎだろうか。

様々な文化的背景を持つ学習者集団を意識して、14課のreadingをはじめとして、ドリルの活動においても多少文化比較を取り上げているのだから、文化社会の比較対照や地球規模の論点をもう少し取り上げてはどうだろうか。統計的な資料などは、限られた日本語能力でも利用できるし、安易なステレオタイプ化を避ける意味でも利用の価値があるのではないだろうか。そして地球規模の視点は、海外での本書使用の拡大につながるのではないか。どの地にあっても、本格的学習に優れた効果を発揮しそうな本書だけに、惜しい気がする。

(3)発信能力を育てる教科書へ

発信する日本語を考えた時、学習者にしてみれば和英の単語リストよりも英和の単語リストが欲しいものである。教科書の編成を見た時、記号・略号の説明は各巻必要だとしても、「はじめに」「この本を使う人のために」「日本語の基本的特徴」「日本語の表記」「基本的なword list」を3巻だぶって載せる必要があるかが気になった。簡略化した言及にとどめたり、「第一巻参照」といった形にしたりすることも可能ではないだろうか。さらに、New Vocabulary and Expressionに併せて五十音順語彙索引を出すというふうに、和英の語彙一覧が親切なわりに、英語からひける語彙索引はない。文型・文法は英語からの検索が可能だが、語彙レベルも考えてはどうだろうか。

色々細かいことを並べたが、本格的学習に優れた力を発揮する可能性を持った教科書であるという感想には揺るぎもない。21世紀を担う学習者にふさわしい「21世紀の教科書」である。長い生命を持つ教科書の誕生を心から祝したい。

(国立国語研究所日本語教育センター第二研究室長)